



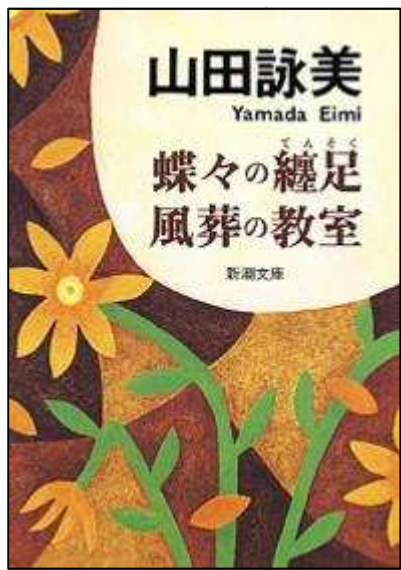
司書という仕事は、本を読んで当たり前、読むのが仕事だと考えられています。それは当然、読まないで紹介できないし、読まないはこの学校の図書館にふさわしい本かどうか判断できません。そんな仕事をしているからこそ、五十音順で紹介している本にまつわるエッセイ、自分の回はやはりちょっと緊張します。

### 本を読むこと

学校司書 大藤佐和

高校時代に読んで心に残っている本、というと、やはり山田詠美の『風葬の教室』。小学5年生の転校生が、

受け入れられた後にいじめに遭い、自殺を考えるとこまでいく、という話。あらすじだけを聞くと、よくあるいじめ克服小説のようだけれども、



これは主人公が冷静に、とても冷静に周囲を観察し、小学5年生とは思えない語り口で今ある状況を分析していく、大人のための小説なのだ。いじめに遭っているわけではなくても、何か生きにくい、自分が周りから浮いているように感じる人には、(そしてたいのティーンエイジャーがそう感じているのだけれども、)

なんだか自分を分かってもらえたかのように思える。かくいう私も、高校時代はもやもやした気持ちを抱え、誰も本当の自分を分かってくれない、とひねくれ、日常生活をおくるのに精一杯だった。今思えば、全くバカげた自意識過剰の高校生活をおくっていた。『風葬の教室』の主人公は、ものすごく自意識過剰だ。周囲を軽蔑し、心の中で一人一人殺していくことで、自分の生きる場所を作っていく。問わず語りに語られるその言葉は、私のなかのもやもやを言語化して見えるようにして、名前をつけてくれた。物語によって救われる、ということを経験した小説だった。

よく、本を読むことで人の気持ちを知ることができる、とか、想像力が養われる、とか言う人がいるけれども、それは全くの誤解だ。そんなことを言う人は、まず本を読んでいない人なのだ。小説を読んでできることは、自分のなかにあるもやもやした、言語化されていない気持ちを、言葉にして、あるいは同じようなシチュエーションを小説のなかに作り出して、自分の感情を自覚することだけだ。知らない感情はいくら読んでも理解できないし、全く分からないことは想像できない。だから小説は、ストーリーを楽しむことだけを目指せばいい。楽しんで読んで、語彙を増やして、自分の内にあるものを表現できるだけの言葉を身につける。語彙をたくさん持つと、自分の感情が言語化で

# 本を読んで賢くならない 大藤佐和

きるようになるから、自分の感情を自覚できるようになる。自分の感情を自覚できると、生きるのが楽になる。何で自分は今苦しいのか、この世界に居場所がないと、受け入れてもらえないと感じてイライラするのか、その疑問に答えられるのは自分だけだ。そのために、自分の言葉を身につけるために読むのだ。自分の言葉が書かれた本は、身のなかにスッと入ってくる。何の苦労もなく読み進めることができる。それは小説であるかもしれないし、科学の本であるかもしれない。もしかすると字の一切書かれていない写真集や画集や楽譜かもしれない。でも、まずは手に取り、表紙をめくって中を開かなければ、その機会は訪れない。その本の手触り、重み、そしてそれを開いている場所、そうしたすべてのことが合わさって、とてもうまく作用した時、自分の言葉をその本のなかに見つけられる。ぜひ、そういう幸せな体験を、十代の内に味わってほしい。十代にしか響かない本もあるのだから。



今は、本自体がとても軽いものになってきている。大人の本であっても、マンガチックな表紙、多用されたひらがな、とても読みやすい文章。だから自分が面白いと思うものを読めばいい、というのが私のスタンスだ。だけれども、高校生、十代後半、やはり読書に慣れた人には、ぜひ近代名作に取り組んでほしい。芥川、太宰、夏目、教科書に載っている作品だけでない、人間の普遍的性質を扱う物語には、何の理由もなくずっと自分のなかに残り続けるものがある。クライマックスもないのに、ふとした時にその小説のワンシーンを思い出す。だから、何年も、何十年も残り続けているのだ。

例えば、芥川龍之介の『秋』。『蜜柑』。『トロッコ』。志賀直哉『小僧の神様』。短編のなかに、人の感情を直接に表すのではなく、状況を、見える景色を描写することで微妙な心の動きを表現する。文章を読むことに慣れていないと難しいけれども、ぜひ高校生の内に触れてほしい。

まったく本と関わらずにきた人には、星新一を薦める。ここまでこの文章を読むことができた人ならば、きっと楽しく読めるはずだ。すべての作品がとんでもなく短いので、あっという間に終わる。それなのに、起承転結がある。『おみやげ』ではこうだ。フロル星人たちの乗った一台の宇宙船が地球にも立ち寄り。しかし、人類が出現するよりずっと前だったので、文明が発達するまでは開けられない金属の容器に、おみやげを入れて立ち去った。やがて時がたち、サルが進化し、人類が現れた。さて、このおみやげの容器は開けられるのか。結末は『ポッコちゃん』(新潮文庫)で。

